

マップ活用シート

指標種 **ツキノワグマ**

主な生息地域



生態系の構成種

上位の生物
(主な捕食者)

なし

下位の生物
(食物とする主な生物)

ブナ科堅果類、サルナシ・ヤマブドウ等液果類、草本類、ササ類のタケノコ、アリ・ハチ等昆虫類

同じ場所に生息する可能性がある主な生物

- 哺乳類：ニホンザル、ニホンリス、ムササビ、モモンガ、ヒメネズミ、カモシカ
- 鳥類：クマタカ、フクロウ、コノハズク、アカゲラ、アオゲラ、クロツグミ、キビタキ、センダイムシクイ、シジウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、カケス
- 爬虫類：ジムグリ、アオダイショウ
- 両生類：ヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、ヒキガエル、ヤマアカガエル
- 昆虫類：エゾゼミ、オオチャイロハナムグリ、ヨコヤマヒゲナガカミキリ、オオトラカミキリ、フジミドリシジミ

生態と生息環境



- ・冷温帯落葉広葉樹林（ブナ林など）を中心に生息し、主にドングリやヤマブドウの果実などの植物を食べますが、昆虫類などを食べることもあります。
- ・行動圏の面積は地域によって差がありますが、雌で 40km² との報告があります。
- ・12月～4月まで、大木の樹洞や岩穴、土穴などで冬眠します。
- ・県内では、近年確認数が増加していますが、生息個体数が増えているわけではなさそうです。

生態系ネットワーク形成の考え方

ツキノワグマは、奥山の樹林の生態系の上位に位置している生物です。マップには、食物条件や行動圏などから算出したツキノワグマの生息適地を示しています。県内では、近年確認記録が増えていますが、奥山でのドングリなどの食物の不足がその原因の一つと考えられています。本種は、人里までくると人との軋轢などが生じることが考えられることから、生態系ネットワークの形成においては、安定的にツキノワグマが生息できる場所の保全、復元に重点をおくことが望まれます。ツキノワグマを代表とする樹林の生態系ネットワーク形成の考え方は次のとおりです。

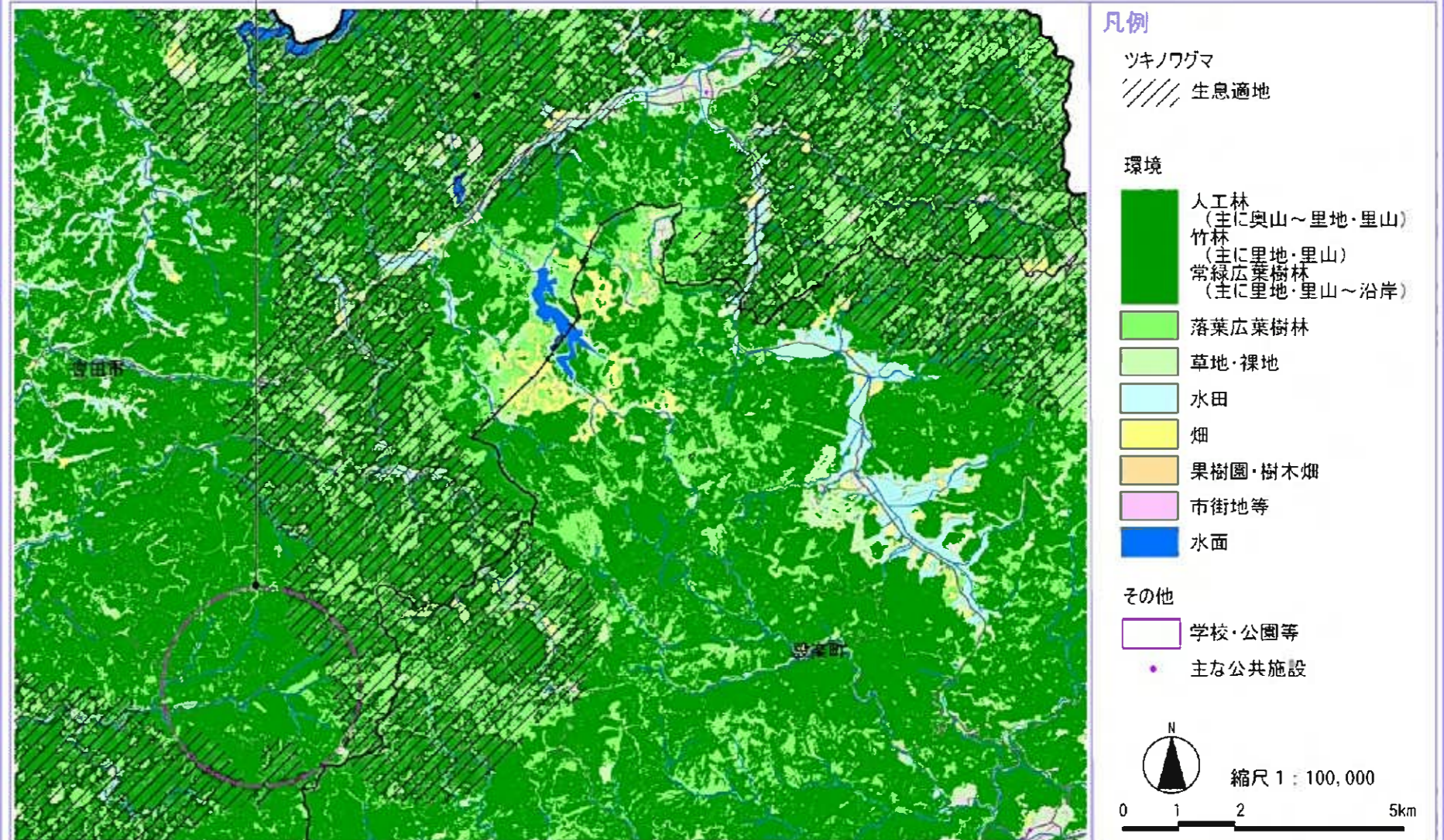
- ①生息適地内のスギ・ヒノキの人工林をドングリや果実などの食物が豊富に得られる落葉広葉樹林へ転換し、ツキノワグマの生息に適した環境へと改善する。
- ②生息適地間についても、同様にスギ・ヒノキの人工林をドングリや果実などの食物が豊富に得られる落葉広葉樹林へ転換し、生息地間の移動経路を確保する。



ツキノワグマ

②の適用場所の例：生息適地間の人工林

①の適用場所の例：人工林と生息適地が重なった場所



注意) 図中の引き出しは「生態系ネットワーク形成の考え方」の説明を理解しやすくするために一部を例示したものです。したがって、図示した場所だけが対象となるものではない点に注意してください。また、実際には現地調査や社会的条件をもとに検討する必要があります。

マップ活用シート

掲載マップ

大拠点ポテンシャルマップ



テン

指標種 テン

主な生息地域



生態系の構成種

上位の生物
(主な捕食者)

クマタカ

下位の生物
(食物とする主な生物)

森林性ネズミ類等小型の哺乳類、小型の鳥類、昆虫類、サルナシ・ヤマブドウ等果実類

同じ場所に生息する可能性がある主な生物

- 哺乳類：ニホンリス、ムササビ、モモンガ、ヒメネズミ
- 鳥類：フクロウ、アオバスク、アカゲラ、アオゲラ、クロツグミ、キビタキ、センダイムシクイ、シジュウカラ、ヤマガラ、カケス
- 爬虫類：ジムグリ、アオダイショウ
- 両生類：ヒキガエル、ヤマアカガエル
- 昆虫類：ハルゼミ、ミヤマクワガタ、ギフチョウ、ウラナミアカシジミ、オオムラサキ

生態と生息環境



- ・森林に生息し、木登りが得意で、森林性ネズミ類等小型の哺乳類、小型の鳥類、昆虫類、サルナシ・ヤマブドウをはじめとする果実類等を食べます。
- ・行動圏は、調査報告では、最小でも約70ha以上、広いものは400ha以上と報告されています。
- ・生息地として、広葉樹林やアカマツ林の成熟した林を好み、スギ・ヒノキ人工林や、伐採地・農地等の開けた場所、若い林は好まないとの調査報告があります。
- ・木の根元の隙間や樹洞を繁殖やねぐらとして使います。

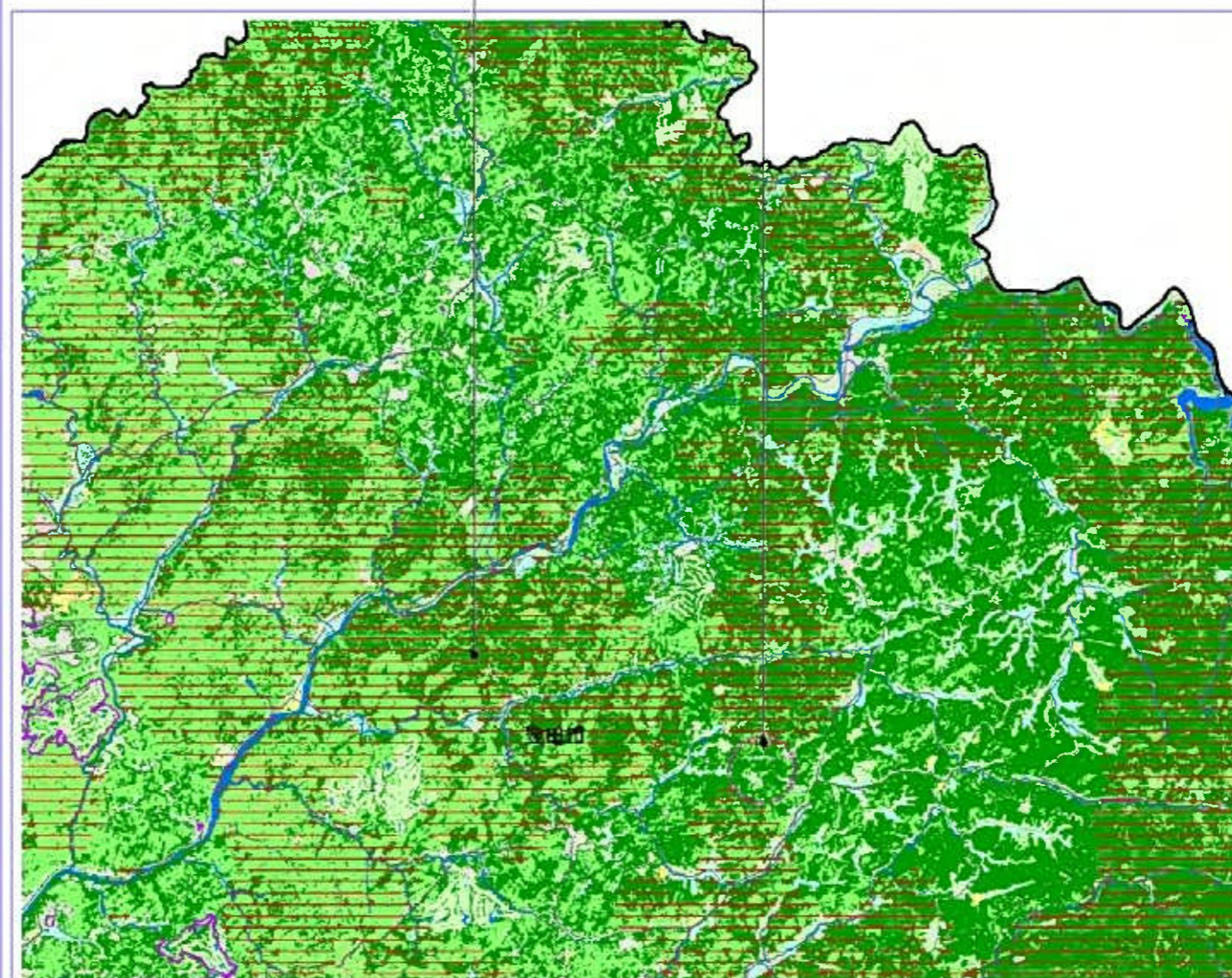
生態系ネットワーク形成の考え方

テンは、奥山から里地・里山にかけての樹林の生態系ネットワークを代表する生物です。マップには、テンの繁殖条件や食物条件から算出した生息適地を示しています。テンを指標種とする樹林の生態系ネットワーク形成の考え方は次のとおりです。

- ①生息適地内のスギ・ヒノキ人工林を在来種の広葉樹林や針広混交林に転換する。その際、大規模な皆伐は、テンの生息環境の悪化につながることから、小面積の伐採で転換して行くことが望まれる。また、落葉広葉樹林も農的な管理を行わず、林内の植物が多く、食物となる動物の多い林とする。これらの取り組みは、実際にテンの生息が確認された場所や、面積の広い生息適地から優先して行う。
- ②生息適地周辺や生息適地間のスギ・ヒノキ人工林を、落葉広葉樹林又は常緑広葉樹林へ転換し、生息適地の拡大とネットワーク化を進める。

①の適用場所の例：人工林と生息適地が重なっている場所

②の適用場所の例：生息適地が離れている場所



凡例

- テン
 - 生息適地
- 環境
 - 人工林 (主に奥山～里地・里山)
 - 竹林 (主に里地・里山)
 - 常緑広葉樹林 (主に里地・里山～沿岸)
 - 落葉広葉樹林
 - 草地・裸地
 - 水田
 - 畑
 - 果樹園・樹木畑
 - 市街地等
 - 水面
- その他
 - 学校・公園等
 - 主な公共施設



注意) 図中の引き出しは「生態系ネットワーク形成の考え方」の説明を理解しやすくするために一部を例示したものです。したがって、図示した場所だけが対象となるものではない点に注意してください。また、実際には現地調査や社会的条件をもとに検討する必要があります。

マップ活用シート

掲載マップ

大拠点ポテンシャルマップ



オオタカ

指標種 オオタカ

主な生息地域



生態系の構成種

上位の生物
(主な捕食者)

なし

下位の生物
(食物とする主な生物)

ハト類、カモ類、小型のサギ類、
ツグミ類、ネズミ類

同じ場所に生息する可能性がある主な生物

哺乳類：アカネズミ、タヌキ、キツネ、イタチ

鳥類：キジ、キジバト、フクロウ、アオバスク、コゲラ、モズ、ク
ロツグミ、ツグミ、キビタキ、ウグイス、シジョウカラ、メ
ジロ、ホオジロ、ムクドリ

爬虫類：シマヘビ、ヤマカガシ、カナヘビ

両生類：ヒキガエル、アマガエル、ニホンアカガエル、モリアオガエル

昆虫類：ハルゼミ、ノコギリクワガタ、カブトムシ、クロカナブン、
ギフチョウ、ウラナミアカシジミ、オオムラサキ

生態と生息環境



- ・県内では山地から丘陵地で1年中生息し、1～8月にかけて繁殖します。冬には平野部の河川敷や農耕地などでも見られます。
- ・アカマツなどの営巣に適した高木を含む森林と、農地などの開けた場所がパッチ状に存在する環境に生息し、主に鳥類、時に小型の哺乳類を捕食します。
- ・営巣は、1 ha 未満の樹林でもしますが、概ね 1.3ha 以上の森林を用いるとの報告があります。

生態系ネットワーク形成の考え方

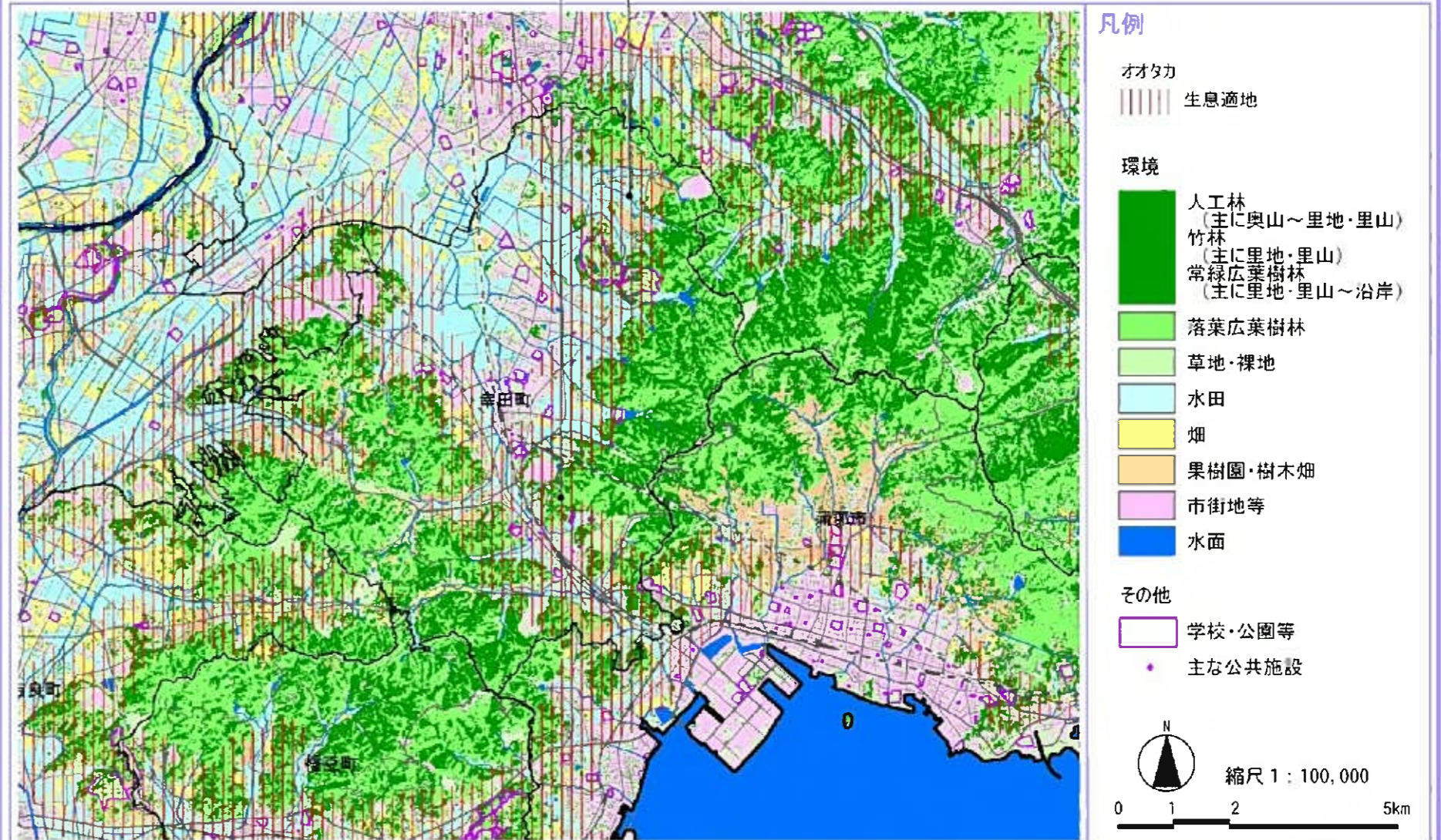
オオタカは、里地・里山や田園の生態系の上位に位置する生物です。

マップには、食物となる生物の豊富な環境と、営巣に適した樹林の存在から算出したオオタカの生息適地を表示しています。オオタカは、鳥類で飛翔能力も高いので、マップに示された生息適地の環境を、オオタカにとって生息しやすい場所にするのが、生態系ネットワーク形成の基本的な考え方です。

- ①生息適地内に存在する樹林を（面積の大きいものから優先的に）保全するとともに、人為的な干渉を少なく保つ場所を設ける。
- ②生息適地内の草地や水辺などの自然地を保全・再生するとともに、農地を保全し、オオタカの主な食物である小型の鳥類が生息しやすい多様な環境が存在する場所とする。

①の適用場所の例：樹林と生息適地が重なっている場所

②の適用場所の例：草地や水辺、農地と生息適地が重なっている場所



注意) 図中の引き出しは「生態系ネットワーク形成の考え方」の説明を理解しやすくするために一部を例示したものです。したがって、図示した場所だけが対象となるものではない点に注意してください。また、実際には現地調査や社会的条件をもとに検討する必要があります。

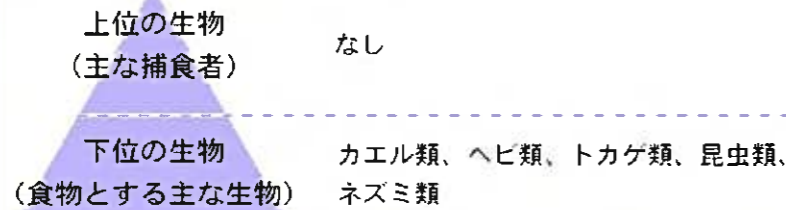
マップ活用シート

指標種 **サシバ**

主な生息地域



生態系の構成種



同じ場所に生息する可能性がある主な生物

- 哺乳類：ハタネズミ、アカネズミ、カヤネズミ、タヌキ、キツネ、イタチ
- 鳥類：キジ、キジバト、アオバズク、コゲラ、モズ、ウグイス、オオヨシキリ、セッカ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、ムクドリ
- 爬虫類：カナヘビ、シマヘビ、ヒバカリ、ヤマカガシ
- 両生類：カスミサンショウウオ、アカハライモリ、アマガエル、トノサマガエル、ナゴヤダルマガエル、シュレーゲルアオガエル、モリアオガエル
- 魚類：ドジョウ、メダカ
- 昆虫類：ハッチョウトンボ、タガメ、ヒメタイコウチ、ゲンゴロウ、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ギフチョウ、ウラナミアカシジミ、ヒメヒカゲ

生態と生息環境



- ・3月下旬に越冬地である東南アジアなどから渡来し、9～10月にかけて渡去します。
- ・夏期に丘陵地から山間部の樹林に営巣し、近接する水田の畦や草地・湿地で、カエル・ヘビ・トカゲ・昆虫類などを捕食します。

生態系ネットワーク形成の考え方

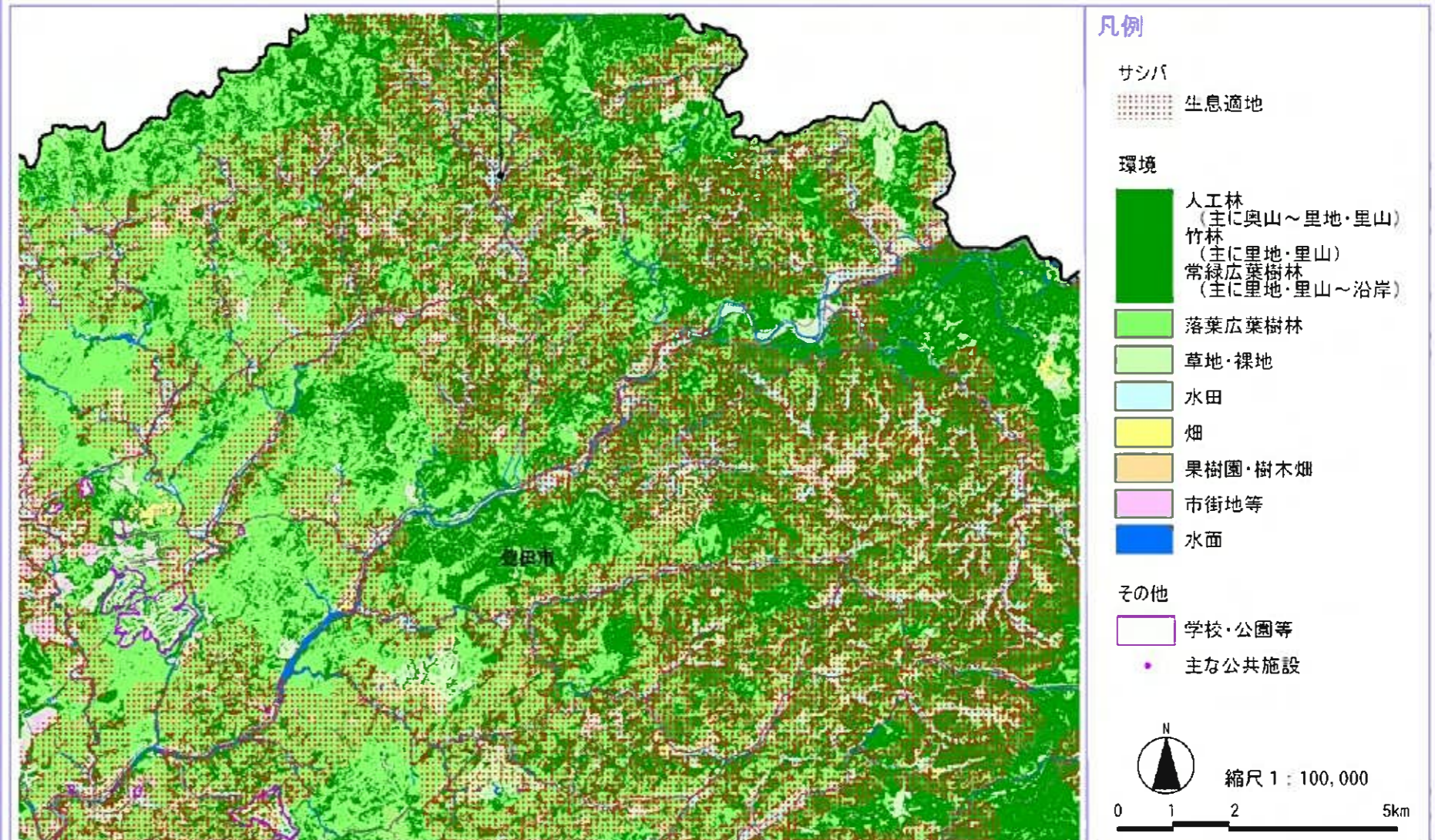
サシバは、里地里山の生態系の上位に位置する生物です。
 マップには、サシバの営巣条件や食物条件などから算出したサシバの生息適地を表示しています。
 サシバは、鳥類で飛行能力も高いので、マップに示された生息適地の環境を、サシバにとって生息しやすいようにすることが、生態系ネットワーク形成の基本的な考え方です。

- ①水田が耕作放棄されたり、畑に転換されると、サシバの主な食物である両生類や爬虫類が減少するので、水田の営農環境を保全するとともに、耕作放棄水田に湿地環境を整備したり、定期的な草刈りで食物をとりやすくする。



サシバ

①の適用場所の例：水田と生息適地が重なっている場所



注意) 図中の引き出しは「生態系ネットワーク形成の考え方」の説明を理解しやすくするために一部を例示したものです。したがって、図示した場所だけが対象となるものではない点に注意してください。また、実際には現地調査や社会的条件をもとに検討する必要があります。

マップ活用シート

掲載マップ

大拠点ポテンシャルマップ



クマタカ

指標種 **クマタカ**

主な生息地域



生態系の構成種

上位の生物 (主な捕食者)	なし
下位の生物 (食物とする主な生物)	ノウサギ、ニホンリス、ネズミ類、ヤマドリ、ヘビ類

同じ場所に生息する可能性がある主な生物

- 哺乳類：ニホンザル、ノウサギ、ニホンリス、ムササビ、モモンガ、ヒメネズミ、ツキノワグマ、テン、アナグマ、カモシカ
- 鳥類：ヤマドリ、フクロウ、コノハズク、アカゲラ、アオゲラ、キビタキ、クロツグミ、センダイムシクイ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、カケス
- 爬虫類：ジムグリ、アオダイショウ
- 両生類：ヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、ヒキガエル、ヤマアカガエル
- 昆虫類：エンゼミ、オオチャイロハナムグリ、ヨコヤマヒゲナガカミキリ、オオトラカミキリ、フジミドリシジミ

生態と生息環境

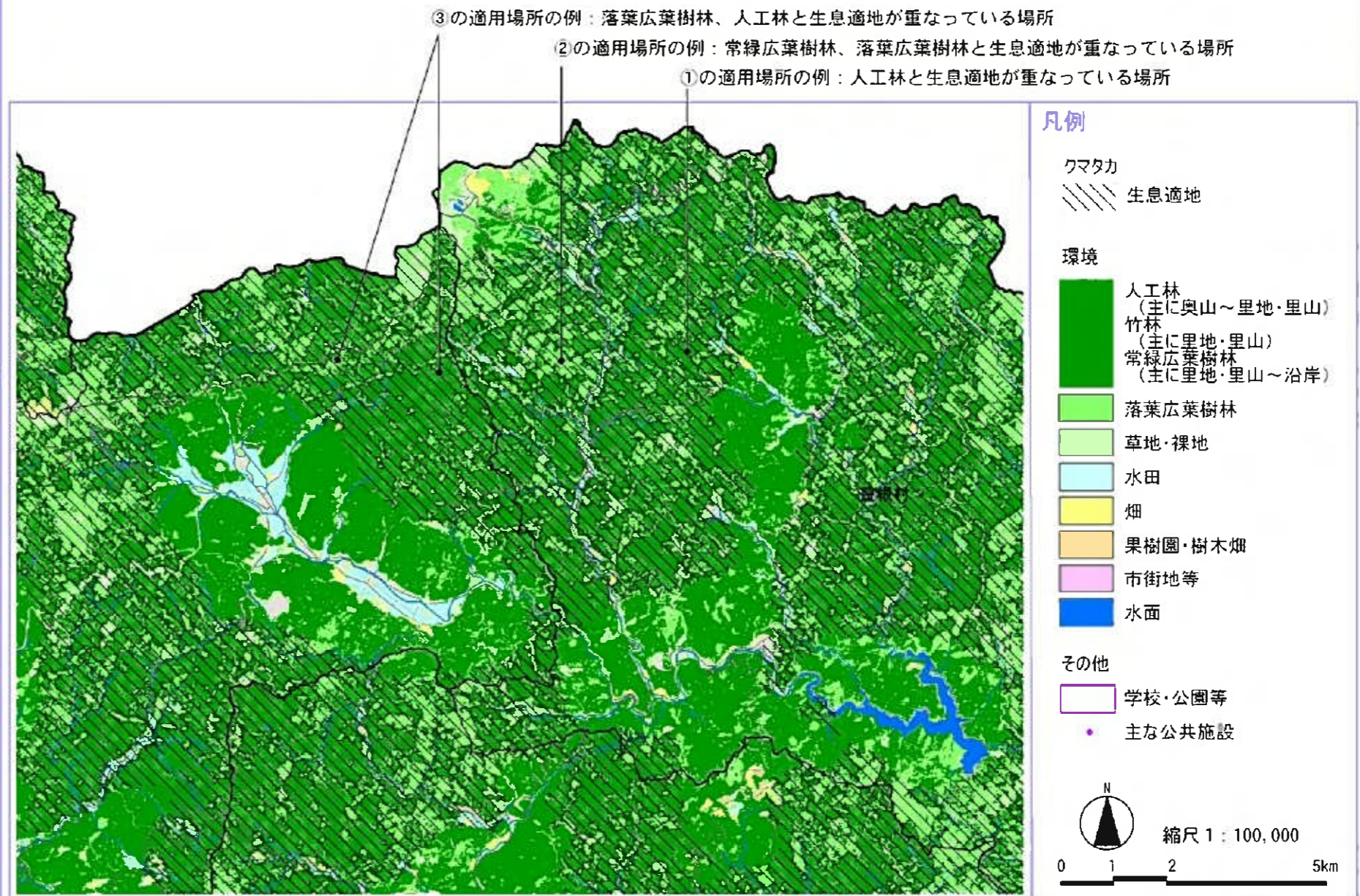


- ・県内の山間部に一年中生息し、繁殖もしますが、その数は限られています。
- ・大型の猛禽類で低山から亜高山帯の森林に生息します。営巣するための大木と、ウサギやヤマドリ、ヘビなどの小～中型動物の豊富な環境が必要です。
- ・行動圏は10 km以上との報告があります。

生態系ネットワーク形成の考え方

クマタカは、奥山の樹林の生態系の上位に位置する生物です。マップには、繁殖条件と生息条件から算出したクマタカの生息適地を表示しています。クマタカは、鳥類で飛翔能力も高いので、マップに示された生息適地の環境を、クマタカにとって生息しやすい状態にすることが基本的な考え方です。

- ①クマタカは食物となる生物は、人工林よりも常緑広葉樹林や落葉広葉樹林のほうが多いため、マップに示された生息適地内の人工林を在来種の広葉樹林や針広混交林に転換する。その際、伐採跡地などは、クマタカがノウサギなどをつかまえる狩り場になることから、段階的に人工林の伐採・転換を行って、常に伐採跡地があるようにする。
- ②クマタカの営巣に適した大木がある常緑広葉樹林や落葉広葉樹林を保全する。
- ③生息適地内の落葉広葉樹林、人工林の林床植生の増加を図るなどして、食物となる生物の多い環境にする。



注意) 図中の引き出しは「生態系ネットワーク形成の考え方」の説明を理解しやすくするために一部を例示したものです。したがって、図示した場所だけが対象となるものではない点に注意してください。また、実際には現地調査や社会的条件をもとに検討する必要があります。

マップ活用シート

指標種

シジュウカラ

主な生息地域



生態系の構成種

注) 都市部に限定して記載した。

上位の生物
(主な捕食者)

ツミ、フクロウ、アオバズク
ヘビ類

下位の生物
(食物とする主な生物)

ガ類やチョウ類の幼虫、
コウチュウ類、クモ類

同じ場所に生息する可能性がある主な生物

哺乳類：アカネズミ、タヌキ
鳥類：アオバズク、キジバト、コゲラ、メジロ
爬虫類：カナヘビ、シマヘビ、アオダイショウ
両生類：ヒキガエル、アマガエル、ニホンアカガエル
昆虫類：クマゼミ、アブラゼミ、アオスジアゲハ、アゲハ

生態と生息環境



- ・都市から奥山まで生息する留鳥です。
- ・樹洞、キツツキの古巣、石垣などに巣をつくり、電柱の穴や巣箱も利用します。
- ・都市部でもある程度まとまった樹林であれば営巣し、樹上や地上の昆虫類などを捕食します。
- ・半径 200m 内の樹林面積が 4ha (32%) 以上あれば安定的に生息し、1.45ha (11.5%) 以上あれば、高い確率で生息するとの報告があります。

生態系ネットワーク形成の考え方

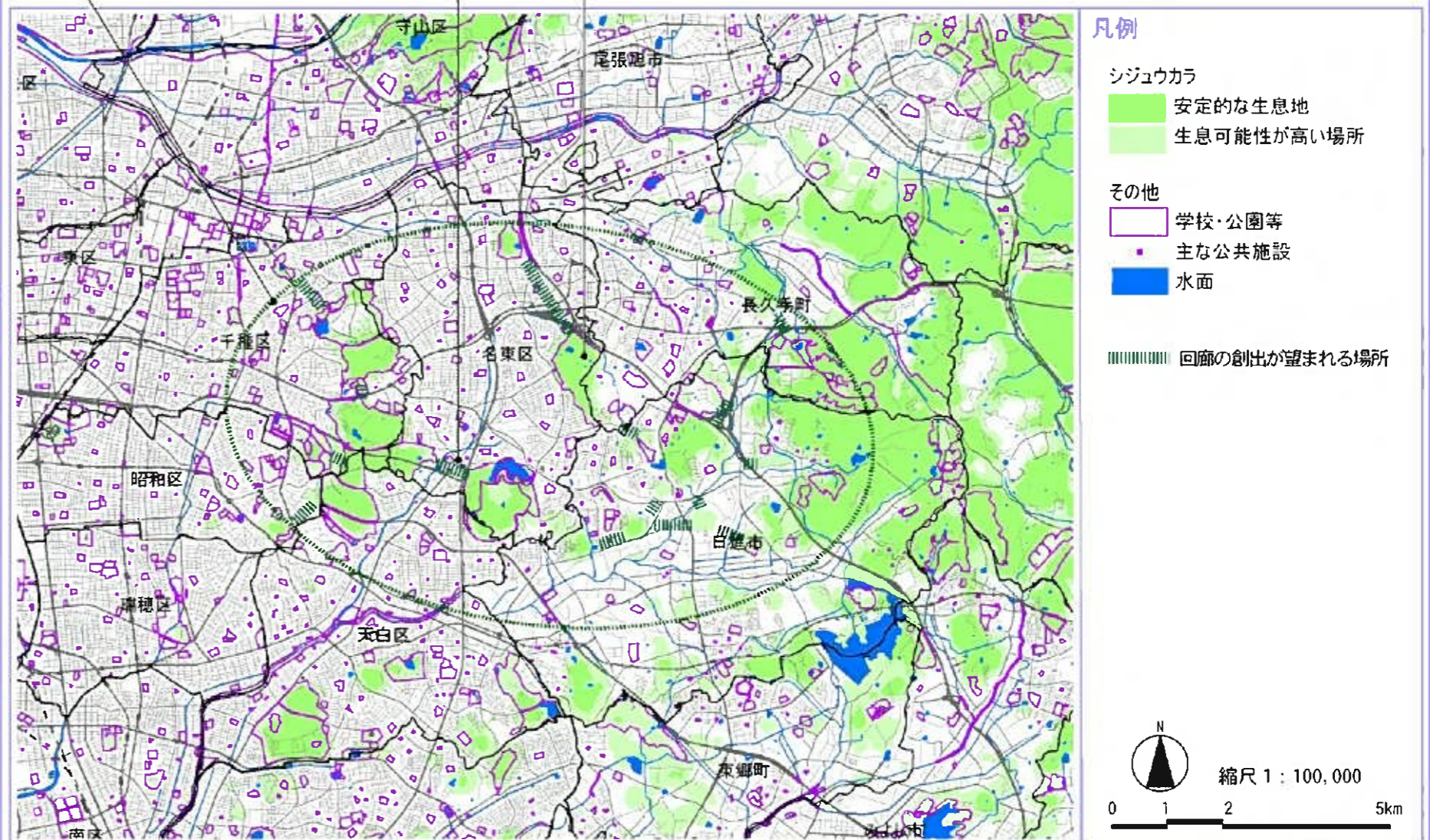
シジュウカラは、奥山から沿岸まで生息しますが、特に、都市部における樹林の生態系ネットワークを代表する生物として選定しました。シジュウカラが生息できる生態系ネットワークを形成することによって、他の樹林性の鳥類や昆虫類なども、都市で生息する可能性が高まります。

マップには、シジュウカラ「安定的な生息地」と考えられる場所と、「生息可能性が高い場所」を示しています。「安定的な生息地」は生態系ネットワークの【拠点】で、「生息可能性が高い場所」は、【拠点】に準ずる場所又は【回廊】として機能します。なお、ここに示した場所の周辺でも、樹木があれば、移動などを行っているシジュウカラを見ることができます。

シジュウカラを指標種とする樹林の生態系ネットワーク形成の考え方は次のとおりです。

- ①「安定的な生息地」や「生息可能性が高い場所」の樹木を増やすと共に、林の構造を高木、亜高木、低木が層をなす状態にしたり、枯れ木を残すことにより、食物となる生物の多い樹林にする。
- ②「安定的な生息地」や「生息可能性が高い場所」をつなぐ場所に、街路樹・道路の緑地帯・緑道・川沿いの樹林などの帯状の樹林を再生したり、公共施設・事業所などのオープンスペースを利用して飛び石状に樹林を再生する。また、住宅地の樹木の増加などに取り組む。
- ③ネットワーク周辺の住宅地等で重点的に樹木の増加に取り組む。

- ②の適用場所の例：「安定的な生息地」や「生息可能性が高い場所」をつなぐ場所
③の適用場所の例：ネットワーク周辺の住宅地等
①の適用場所の例：「安定的な生息地」や「生息可能性が高い場所」



凡例

- シジュウカラ
■ 安定的な生息地
■ 生息可能性が高い場所
- その他
 学校・公園等
● 主な公共施設
 水面
- ⋯⋯⋯⋯⋯ 回廊の創出が望まれる場所

注意) 図中の引き出しは「生態系ネットワーク形成の考え方」の説明を理解しやすくするために一部を例示したものです。したがって、図示した場所だけが対象となるものではない点に注意してください。また、実際には現地調査や社会的条件をもとに検討する必要があります。



シジュウカラ

マップ活用シート



オオムラサキ

指標種 オオムラサキ

主な生息地域



生態系の構成種

上位の生物
(主な捕食者)

森林性鳥類 (ツグミ科・ヒタキ科・ウグイス科・シジュウカラ科など)

下位の生物
(食物とする主な生物)

【幼虫】エノキの葉
【成虫】フナ科樹木などの樹液

同じ場所に生息する可能性がある主な生物

- 哺乳類：ニホンリス、アカネズミ、タヌキ
- 鳥類：アオバズク、アオゲラ、コゲラ、クロツグミ、キビタキ、センダイムシクイ、シジュウカラ、メジロ
- 爬虫類：シマヘビ、ヤマカガシ
- 両生類：ヒキガエル、ニホンアカガエル
- 昆虫類：ミヤマクワガタ、ノコギリクワガタ、クロカナブン、カブトムシ、ミスイロオナガシジミ、ウラナミアカシジミ

生態と生息環境



- ・山地や丘陵地、河岸段丘の雑木林や河畔林に生息しています。
- ・成虫は、コナラやクヌギなどの樹液を吸い、幼虫はエノキの葉を食べます。
- ・成虫は年1回、6月中下旬から発生し、幼虫は地面に降りて、落ち葉の中で翌年の春まで越冬します。
- ・樹林づたいであれば1 km程度移動します。草地などの樹林以外の開放域はほとんど使わないとの報告があります。

生態系ネットワーク形成の考え方

オオムラサキは、奥山や里地・里山における樹林の生態系ネットワークを代表する生物です。オオムラサキの生息できる生態系ネットワークを形成することによって、雑木林の拡大や連続性の確保がすすみ、他の森林性の生物が生息する可能性が高まります。

マップには、エノキが生育している可能性がある雑木林を、オオムラサキの生息適地として、また、その他の樹林を移動が可能な場所として表示しています。

オオムラサキを指標種とする樹林の生態系ネットワーク形成の考え方は次のとおりです。

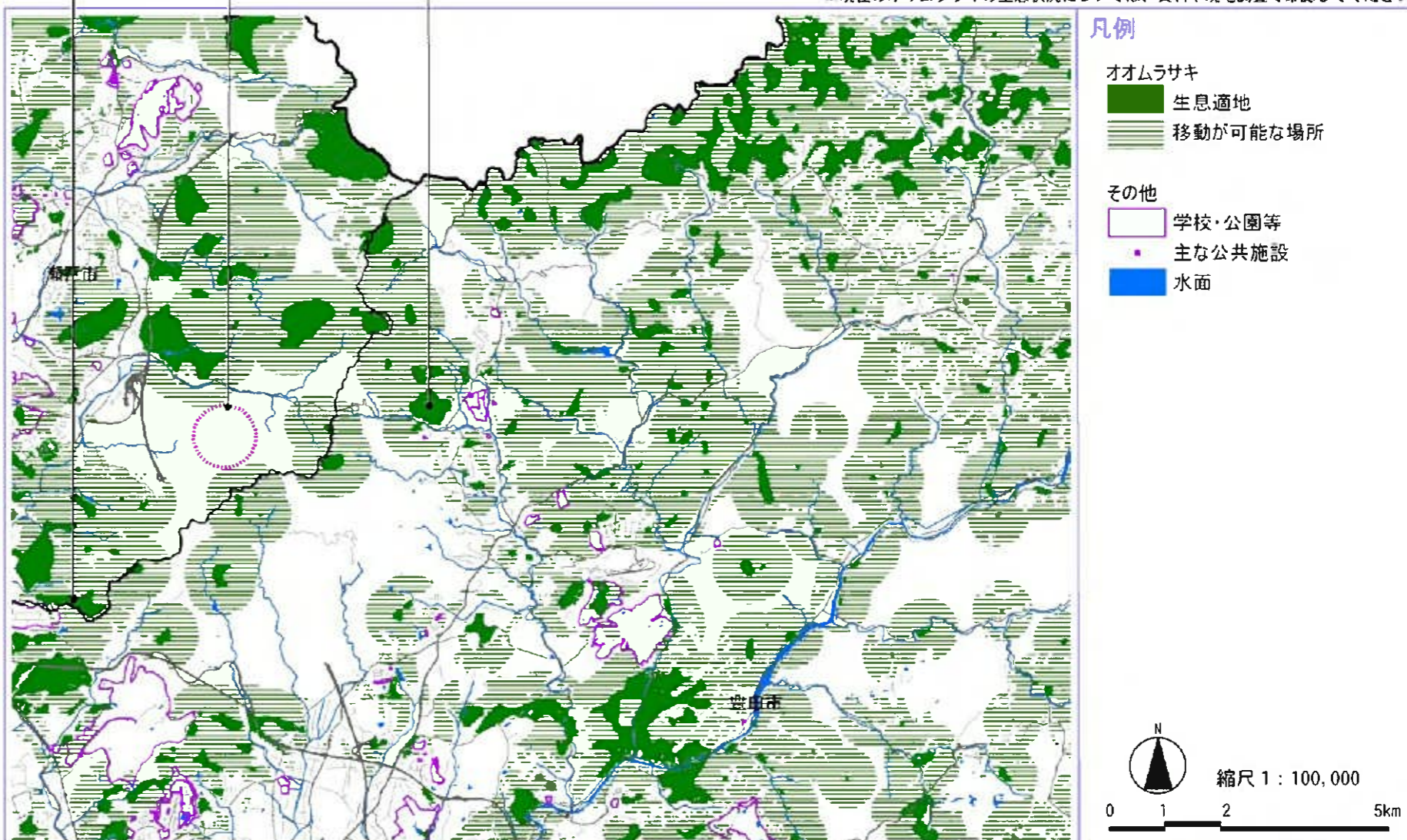
- ①現在、オオムラサキが生息している場所については、幼虫の食樹であるエノキを保全するとともに、幼虫が越冬する根際の落ち葉を保全する。また、成虫の主な生息場所となるコナラ、アベマキ等の落葉広葉樹林の保全、拡大を図る。
- ②現在、オオムラサキが生息していない生息適地については、エノキの育成および落葉広葉樹林の保全と拡大を図る。
- ③現在、オオムラサキが生息している樹林とその他の生息適地の間に、オオムラサキが移動できるように樹林を再生する。

②の適用場所の例：現在オオムラサキが生息していない生息適地※

③の適用場所の例：移動可能な場所が、離れている場所

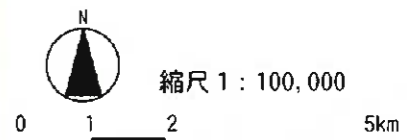
①の適用場所の例：現在オオムラサキが生息している場所※

※現在のオオムラサキの生息状況については、資料や現地調査で確認してください。



凡例

- オオムラサキ
 - 生息適地
 - ▨ 移動が可能な場所
- その他
 - 学校・公園等
 - 主な公共施設
 - 水面



注意) 図中の引き出しは「生態系ネットワーク形成の考え方」の説明を理解しやすくするために一部を例示したものです。したがって、図示した場所だけが対象となるものではない点に注意してください。また、実際には現地調査や社会的条件をもとに検討する必要があります。

マップ活用シート



カヤネズミ

指標種 カヤネズミ

主な生息地域



生態系の構成種

上位の生物
(主な捕食者)

イタチ、チョウゲンボウ、コミミズク、ヘビ類

下位の生物
(食物とする主な生物)

イネ科植物の種子、小型の昆虫類

同じ場所に生息する可能性がある主な生物

- 哺乳類：イタチ
- 鳥類：コミミズク、チョウゲンボウ、オオヨシキリ、セッカ、オオジュリン
- 爬虫類：カナヘビ、シマヘビ、ヒバカリ、ヤマカガシ
- 両生類：アマガエル
- 昆虫類：マツムシ、ショウリョウバッタ、ショウリョウバッタモドキ、ギンイチモンジセセリ、ヒメジャノメ

生態と生息環境



球果

- ・体重約7~8gでネズミの仲間では最小の種類です。
- ・ススキ、オギ、チガヤなどのイネ科植物の草地を生息場所とし、初夏と秋は、イネ科植物の葉で球状の巣(球果)をつくって繁殖します。冬は冬眠せず地面の堆積物の下や坑道で生活しています。
- ・繁殖は一般的には、初夏と秋の2回行います。
- ・行動圏は約400mとの報告があります。

生態系ネットワーク形成の考え方

カヤネズミは、里地・里山から沿岸までの草地の生態系ネットワークを代表する生物です。カヤネズミが生息できる生態系ネットワークを形成することによって、草地に生息する生物の多様性が高まると考えられます。また、面積が広がると、コミミズク、チョウゲンボウ、セッカ、オオヨシキリ、オオジュリンなどの、草地をすみかとする鳥類などの生息地にもなります。

マップには、ススキやオギ、チガヤ、ヨシなどのイネ科植物の草地をカヤネズミの生息適地として示しています。

カヤネズミを指標種とする草地の生態系ネットワーク形成の考え方は次のとおりです。

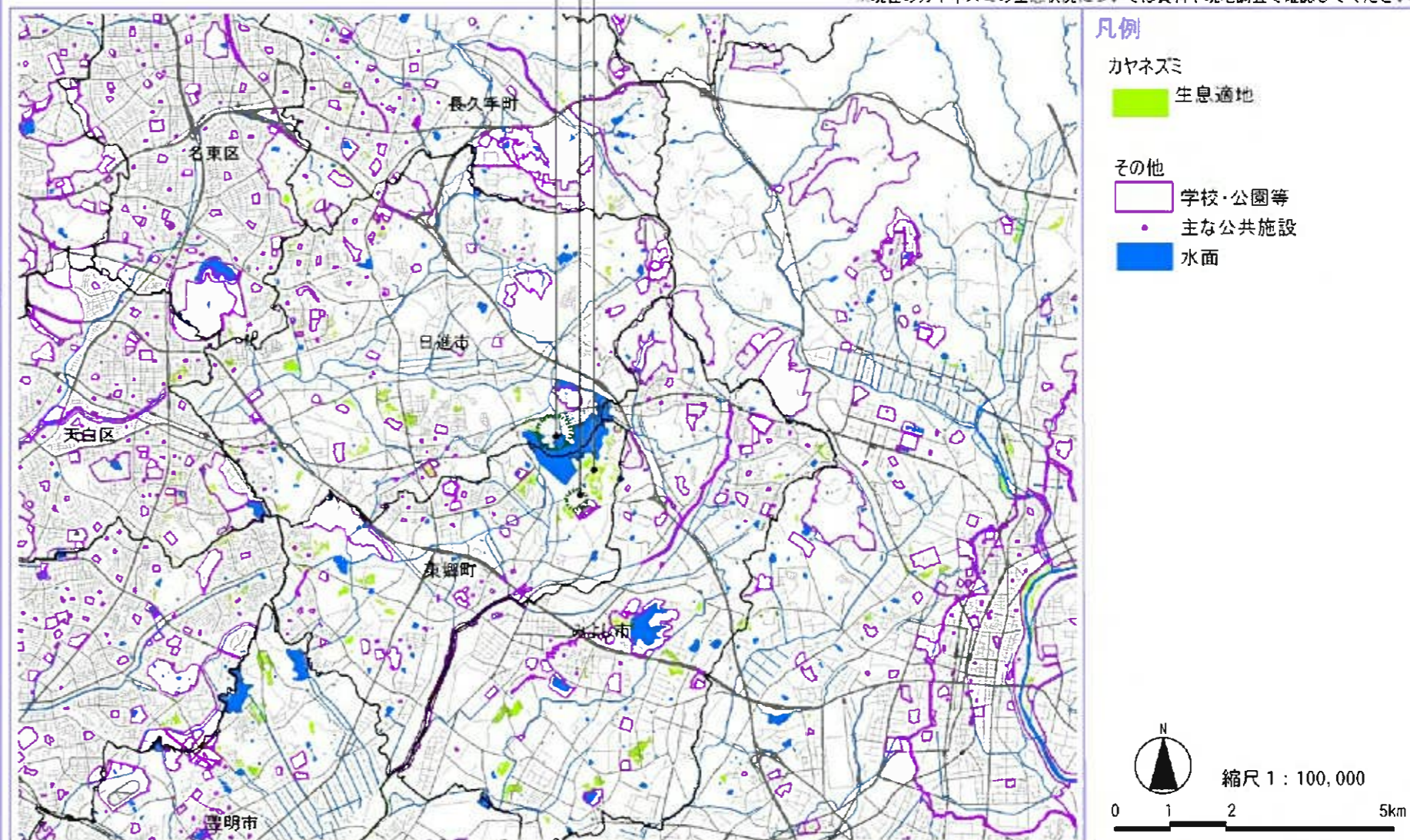
- ①現在、カヤネズミが生息している場所については、草地を守るとともに面積の拡大を検討する。また、子育て期間中(5~7月及び、9~11月)に草刈りを行わないなどの配慮をする。
- ②現在、カヤネズミが生息している場所を【拠点】として、近くの生息適地との間に【回廊】となるイネ科草地を創出して、拠点間を移動できるようにする。
- ③河川敷や堤防、ため池のまわり、休耕地などがイネ科植物の草地を再生する場所として適しているため、これらの場所で、【拠点】や【回廊】となるイネ科植物の草地を創出し、生態系ネットワークを形成する。

③の適用場所の例：河川敷や堤防、ため池のまわり、休耕地など

②の適用場所の例：現在カヤネズミが生息している場所※と生息適地の間

①の適用場所の例：現在カヤネズミが生息している場所※

※現在のカヤネズミの生息状況については資料や現地調査で確認してください。



注意) 図中の引き出しは「生態系ネットワーク形成の考え方」の説明を理解しやすくするために一部を例示したものです。したがって、図示した場所だけが対象となるものではない点に注意してください。また、実際には現地調査や社会的条件をもとに検討する必要があります。

マップ活用シート



マガモ

指標種 カモ類（マガモ属） マガモ・カルガモ・コガモ・ヒドリガモ・オナガガモなど

主な生息地域



生態系の構成種

上位の生物
(主な捕食者)

オオタカ、ハヤブサ

下位の生物

(食物とする主な生物) 水生植物、イネ科植物の種子、落ち穂

同じ場所に生息する可能性がある主な生物

哺乳類：イタチ

鳥類：カイツブリ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、オオバン、カワセミ

爬虫類：クサガメ、イシガメ、スッポン

両生類：トノサマガエル、ナゴヤダルマガエル

魚類：フナ類、モツゴ、タモロコ、ドジョウ、メダカ

昆虫類：アジイトトンボ、シオカラトンボ、アキアカネ、タガメ、タイコウチ、ミスカマキリ、ゲンゴロウ、ヘイケボタル

生態と生息環境



・カモ類のうち特にマガモ属は、池沼や流れの緩やかな河川で集団で休息し、約 10km 圏内の水田や湿地、湖岸の岸辺で採食します。

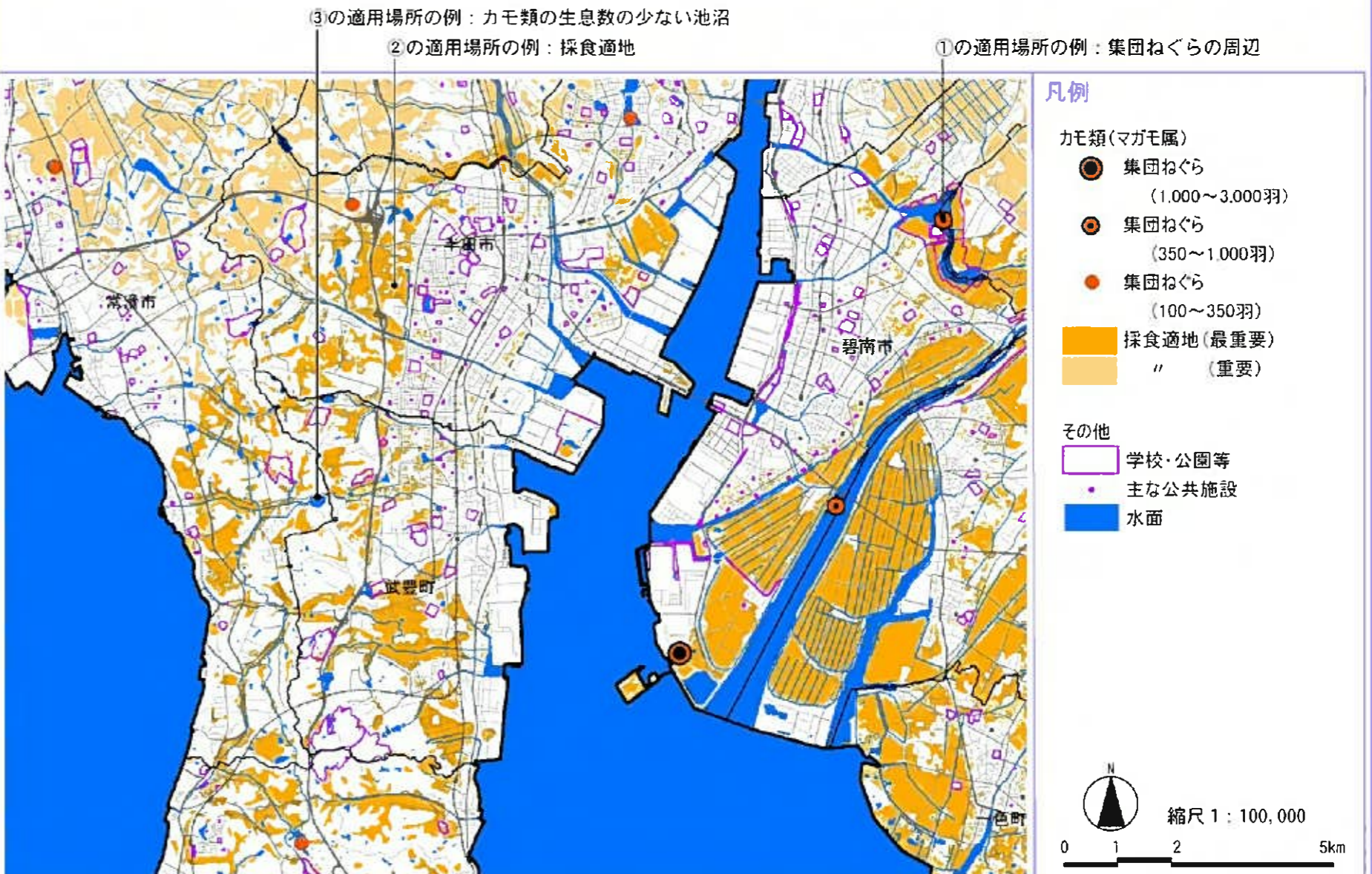
生態系ネットワーク形成の考え方

カモ類（マガモ属）の多くは、池沼や流れの緩やかな河川で休息し、稲刈り後の水田や草地などで採食しており、里地・里山や田園における、水域と農地・草地の生態系ネットワークを代表する生物です。

マップには、過去に記録のあるカモ類（マガモ属）のねぐらと、ねぐらから 10km 圏内の採食適地を表示しています。

カモ類（マガモ属）を指標種とする生態系ネットワークの形成にあたっての基本的な考え方は次のとおりです。

- ①ねぐらを保全するために、人の立ち入り制限や、緩衝帯となる草地や樹林の整備などを行う。
- ②採食適地の水田で落ち穂を残すほか、草地を増やすといった配慮を行う。
- ③ねぐらを増やすために、現在、カモ類（マガモ属）の生息数が少ない池沼においても、立ち入ったりしないようにするほか、緩衝帯となる草地や樹林の整備、特定猟具使用禁止区域（銃）の指定などを行う。



注意) 図中の引き出しは「生態系ネットワーク形成の考え方」の説明を理解しやすくするために一部を例示したものです。したがって、図示した場所だけが対象となるものではない点に注意してください。また、実際には現地調査や社会的条件をもとに検討する必要があります。

マップ活用シート

指標種 サギ類 コサギ・チュウサギ・ダイサギ・アマサギ・アオサギ・ゴイサギなど

掲載マップ

水辺ポテンシャルマップ



ダイサギ

主な生息地域



生態系の構成種

上位の生物 (主な捕食者) オオタカ、ハヤブサ

下位の生物 (食物とする主な生物) 魚類、カエル類、甲殻類

同じ場所に生息する可能性がある主な生物

【採食地＝水田・河川・池沼】

- 哺乳類：カヤネズミ、イタチ
- 鳥類：カルガモ、ヒクイナ、タマシギ、カワセミ、ツバメ、オオヨシキリ、セッカ
- 爬虫類：ヒバカリ、ヤマカガシ、クサガメ、イシガメ、スッポン
- 両生類：アマガエル、トノサマガエル、ナゴヤダルマガエル、シュレーゲルアオガエル
- 魚類：アユ、フナ類、ウグイ、オイカワ、ドジョウ
- 昆虫類：アジイトトンボ、シオカラトンボ、アキアカネ、タガメ、タイコウチ、ミズカマキリ、ゲンゴロウ、ヘイケボタル

生態と生息環境



- ・樹林や竹林などにコロニー（集団繁殖地）を形成し、コロニーの周辺の河川・池沼及び水田を採食地として利用します。
- ・コロニーから10km圏で約7割が、15km圏で約9割が採食するという報告があります。

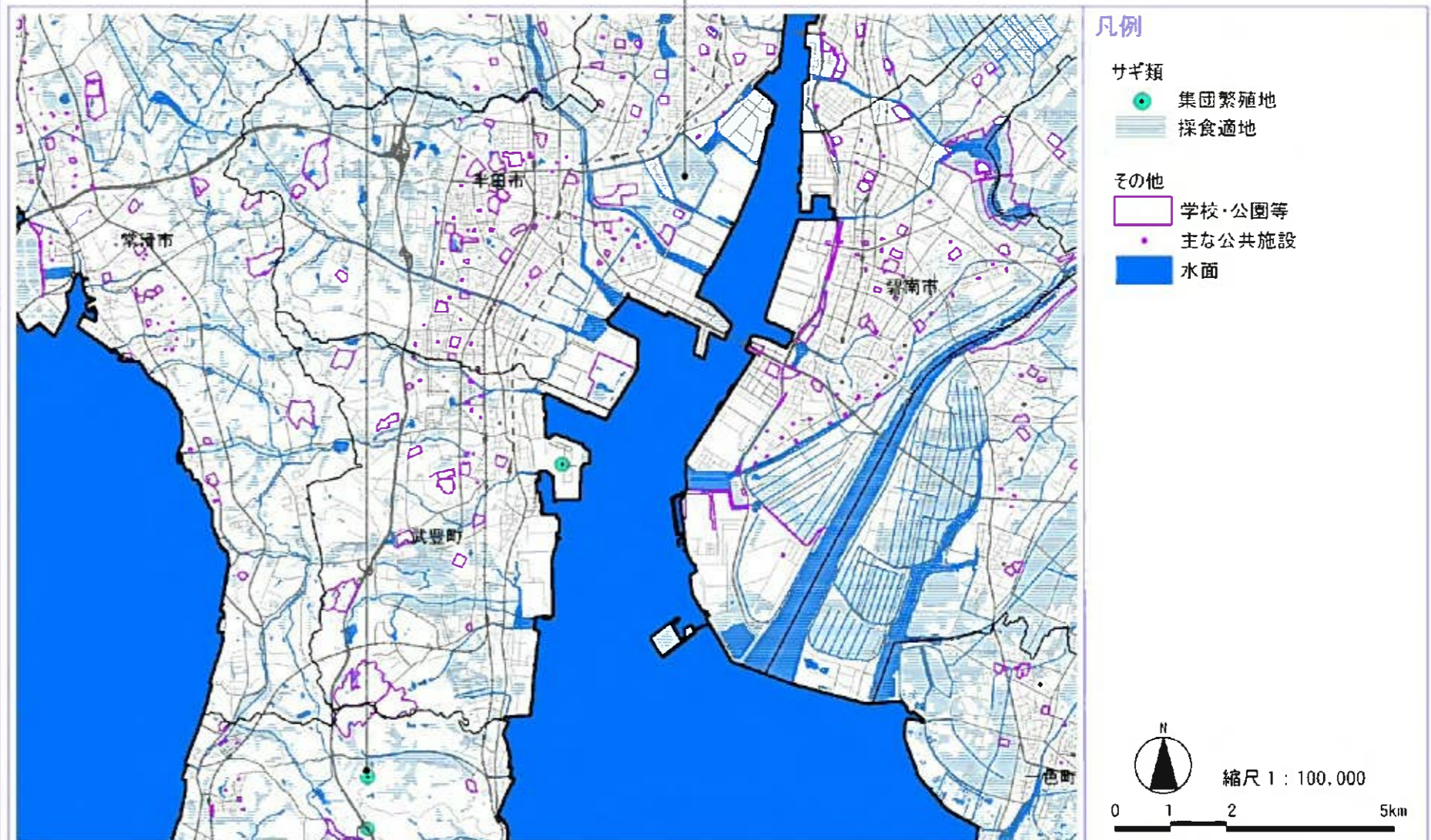
生態系ネットワーク形成の考え方

サギ類は、里地・里山や田園の水辺の生態系ネットワークを代表する生物です。サギ類の生息できる生態系ネットワークを形成することにより、両生類や魚類、昆虫類等の多い水辺の創出につながります。

マップには、過去に記録がある集団繁殖地の概ねの位置と集団繁殖地周辺のサギ類の採食適地を表示しています。サギ類を指標種とする生態系ネットワークの形成にあたっての基本的な考え方は次のとおりです。

- ① 集団繁殖地を保全するために、人の立ち入りなどの影響を少なくする。
- ② 採食適地の河川や池沼、水田地帯に、魚類やカエル類が多く生息する草地や湿地、土水路を保全・再生する。また、多自然型護岸、魚道を整備する。

①の適用場所の例：集団繁殖地 ②の適用場所の例：採食適地の河川、池沼、水田地帯



注意) 図中の引き出しは「生態系ネットワーク形成の考え方」の説明を理解しやすくするために一部を例示したものです。したがって、図示した場所だけが対象となるものではない点に注意してください。また、実際には現地調査や社会的条件をもとに検討する必要があります。